

古典落語大系

第七卷

責任編集 江國 滋

大西信行 永井啓夫

矢野誠一 三田純一

三一書房

古典落語大系 第七卷

一九七〇年一月十五日 第一版第一刷発行
一九七三年一月十五日 第一版第二刷発行
編者 江國 滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

© 一九六九年

発行者 田川敬吾
発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一) 三二三一〜五番
郵便番号一〇一
振替東京八四一六〇番

印刷所 株式会社三陽社
製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

古典落語大系 第七卷 目次

牛寝め（うしほめ）——無学の耳学問……………	七
禁酒番屋（きんしゅばんや）——意地汚なき番屋の役人……………	一九
厄払い（やくはらい）——落語のふるさと……………	二九
宿屋の仇討（やどやのあだうち）——庚申待……………	四〇
真田小僧（さなだこぞう）——仇名……………	五一
付き馬（つきうま）——にくみきれない……………	五九
鼻ほしい（はなほしい）——鼻のはなし……………	七四
茶 金（ちゃきん）——ぼくらのつぎなる目標……………	八二
八問答（はちもんどう）——名数考……………	八三
看板のピン（かんばんのピン）——ある芸談……………	一〇〇
錦の袈裟（にしきのけさ）——反骨のフンドシ……………	一〇六
からくり屋（からくりや）——覗きの世界……………	一二七
山崎屋（やまざきや）——サト言葉の効用……………	一二七
愛宕山（あたごやま）——『落語鑑賞』のことども……………	一四一
弥次郎（やじろう）——嘘の愉しさ……………	一五三

五人廻し（ごにんまわし）――廊ばなしは消えてしまうか？	一五
小言念仏（こごとねんぶつ）――念仏の芸能化	一七
仇討屋（あだうちや）――高田馬場界限	一七
棒　鱈（ぼうだち）――悪口の芸術	一八
もう半分（もうはんぶん）――黒い滑稽の手応え	一九
今戸の狐（いまどのきつね）――仕込みばなしのサンプル	二五
館　林（たてばやし）――館林のサゲ	二六
紙入れ（かみいれ）――もうひとつの『紙入れ』	三四
へっつい幽霊（へっついゆうれい）――註釈不要	三九
掛取万歳（かけとりまんざい）――暮のはなし	四七
三軒長屋（さんげんながや）――懐れの江戸ことば	五九
火事息子（かじむすこ）――三木助の『火事息子』	六五
居残り佐平治（いのこりさへいじ）――佐平治のテネシーワルツ	三三

装幀 長尾みのる

古典落語大系 第七卷

牛褒め（うしほめ）

「与太郎や、ちょっとここへおいで」

「なんだい。おとつあん」

「まア、そこへすわれ」

「ウン、すわった。なにか食わせるか」

「なにも食わせやアしないよ。そういうふうだからお前のことを、みんながばかだ、ばかだというだろう」

「ウン、みんながそういつてくれる」

「くれるといつてよろこんでいちやアいけないよ。お前はなんとも思うまいが親の身になってみる。どうかばかといわれぬようにさせたいと思つて苦労が絶えやアしない。……それよりもお前、これから佐兵衛さんの家へ行つて来ておくれ」

「おつかいかい」

「お前は知らないだろうが、今度、佐兵衛さんが新しい家建てたんだが結構な普請でたいへんな自慢なんだそ
うだ。四五日前に拝見にうかがつたらお留守なんでそのままにもいわずに帰つて来たんだが、きょうはこれか
らお前が行つて家を褒めて来ておくれ」

「ウン、じゃア行ってくるよ」

「おいおい、なにも知らないでいきなりとび出すやつがあるか。むこうへ行つていうことを教えてやるからよく

おぼえて行け。先方へ行ったら、まず第一にていねいにお辞儀をするんだ。それから、『さて、こんにちは結構なお天気でございます。このたびはご普請が落成でおめでとうございます。さっそくお家を拝見に上りました』といえば『どうぞ、こちらへ』と奥へ通してくれる。そうしたら、まず材木からほめはじめなんだ。『ご普請は総体檜づくりでございますな。畳は備後の五分縁で、左右の壁は砂摺りでございますな。天井は薩摩の鵜木目、お庭はすべて御影づくり。床の間のお掛けものは隠元禅師の茄子の絵で、上には讃がしてございます。』都ではまだ味知らず初茄子、これはたしか去來の句でございますな』とほめてみる。ばかだと思つていたお前がこのくらいのことをいえばむこうはきつとおどろくから……」

「いやア、むこうよりもおれのほうがおどろいた」

「どうして」

「なんだか、バアバアいつてたけど、おれにはちつともわからない」

「そりゃア一度ではわからないだろうから稽古をしておぼえてゆくんだ。さア、あたしのいうとおりやってみろ」

「なにをやるんだ」

「あたしのいうとおりについてみるんだ」

「そうか。じゃア何とでもいつてみる」

「なんだ。それが親にむかっていうことか。……ご普請は総体檜づくりでございますな」

「ご普請は、総体へノキづくりでございますな」

「へノキじゃアない。檜だ。畳は備後の五分縁で」

「畳は貧乏で、ボロボロで」

「そうじゃアない。備後表の五分縁だ」

「フウ、びんつけ油の堅練りで」

「畳は、備後の、五分縁」

「たたみは、ビンゴの、ゴフベリ」

「左右の壁は砂摺りでございますな」

「佐兵衛のかかアは、おひきずり」

「いけねえなア、そんなことをいっちゃア。それじゃアまるで佐兵衛さんの家へ喧嘩を売りに行くようなものだ。おひきずりじゃアない。よくきいておくれ。左右の壁は砂摺り……だ」

「左右の、壁は、砂摺りだ」

「天井は薩摩の鞠木目」

「天井は、薩摩芋にうすら豆」

「お昼のおかずの相談をしているんじゃないよ。よくきいていろよ。天井は、薩摩の鞠木目だ」

「天井は、薩摩の、うすら、もくめ」

「お庭はすべて御影づくり」

「お庭はすべて見かけたおし」

「そんなことをいっちゃアいけない。お庭はすべて御影づくり」

「すべて、御影、づくり」

「床の間のお掛けものは、隠元禅師の茄子の絵で」

「床の間の掛けものは、隠元豆に唐茄子の化けもの」

「八百屋の棚おろしをしているんじゃないよ。隠元禅師というお方がお書きになった茄子の絵だ。いいかい。よく覚えるんだ。隠元禅師の茄子の絵で、上には讃がしてございます」

「上には讃がしてございます」

「都ではまだ味知らず初茄子」

「都では、まだ味知らず、初茄子」

「これはたしか、去來の句でございますな」

「これはたしか、去年の暮れでございますな」

「去年の暮れじゃアないよ」

「そんなら今年か」

「ちがうってば」

「來年か」

「年をきいているんじやアないよ。去來の句でございますなというんだ」

「そのとおりでございます」

「そのとおりというやつがあるか。どうだ、少しはわかったか」

「ううん、ちつともわからない」

「しやうがないやつだなア。それでは、そこにある紙と硯箱を持って來い。あたしが仮名で書いてやるから、それを読みながらおぼえてみる。ほかでも仮名だけ読めるのが取柄なんだから。……よし、よし、さア、書いたぞ。これを先方に見られないようにむこうへ行つていつてみる。いままでのようにばかとはいわず与太郎とか与太郎さんとか呼んでくれるようになるだろう。うまくやつて來な」

「うん」

「そうそう、座敷からまッ正面に見える台所の柱に大きな節穴があつた。それを佐兵衛さんが気にしているとおかみさんがいつていた。もしその話が出たら、こういつてやれ」

「なんていうんだ」

「お座敷の柱ではなし、台所の柱ですからお氣にかけることはございません。穴の上へ火の用心」の札をおはりになれば、穴がかくれてそのうえ火伏せになります……とこういうんだ」

「そんなに長くっちゃアおぼえられないよ」

「そんなら、穴の上にへ火の用心」の札をおはりなさいと、これだけいつてみる。穴がかくれて火伏せになるぐらいのことはむこうで考えてくれるだろう」

「ああ、そのくらいならたぶんいえるだろう」

「ひとのこのようにいうない。うまくやってくるんだぞ。うまくいえばこづかいの少しもくれるかもしれない」

「へーエ、こづかいを……いくらぐらいくれるだろうか」

「こいつ、欲だけは一人前だなア。まア、お前が相手じゃアいくらもくれまいが、百や二百はくれるだろう」

「もし、くれなかったらお前がたてかえるか」

「誰がたてかえるものか。そんなことをいわずにはやく行ってこい。節穴のことを忘れるなよ。うまくやって来いよ」

「うん、うまくやればこづかいがもらえるんだな」

「これこれ、こづかいのことは忘れてもいいから、へ火の用心」のお札を忘れるなよ」

「うん、大丈夫だ」

さつそくやってまいりました佐兵衛さんの家、玄関にむかって与太郎が、

「オーイ、佐兵衛さん、佐兵衛さん」

「おい、ばあさん、ごらんよ。ばかというものはしょうがない。子供が遊びに来たようにおもてからあたしをよんでるよ。どうした、ばか」

「上ってもいいかい」

「いいから、こっちへお上り」

「どっこいしょ。上つたらず第一におじぎだ。それから……さて、こんにちは結構なお天気でございます」

「ばあさん、きいたかい。おどろいたねえ、きようはあいさつができるぜ。はいはい、こんにちは、結構なお天気で」

「このたびはご普請がご落成でおめでとうございます。さっそく、お家を拝見に上りました」

「いや、これはありがたいな。さあさあ、どうか、よく見ていっておくれ」

「よし、見てやるから覚悟しろ」

「アハハハ……、覚悟というのはおかしいな。よしよし、覚悟をしたよ」

「覚悟をしたら、あっちをむいておくれ」

「ヘエ、後をむくのか。よしよし、後をむいたよ」

「こっちをむいちゃアいけないよ。いま、ほめてやるんだから。エーと、ご普請は、総体檜づくり、畳は備後の五分縁で、佐兵衛のかかアは、おひきずり」

「なんだと」

「そうじゃアない。左右の壁は砂摺り……でございますな。天井は薩摩の鰯木目、お庭はすべて御影づくり、床の間のお掛けものは隠元禪師の茄子の絵で、上には讃がしてございます。『都ではまだ味知らず初茄子』、これはたしか去来の句でございますな。……さア、もうこっちをむいてもいいよ」

「与太さん、お前、なにか読んでいたんじゃアないのかい」

「読んでなんかいないよ」

「いや、読んだにしても、お前さんがそんなにほめてくれるというのはありがたい。しかしながらいところばかりはないもので、あのとおり台所の柱の節穴が正面に見えるのでこまっているんだ。どこかへまわせばいいのに大工が木取りをまちがえたらしくって気になっていけない」

「なアに佐兵衛さん。そんな節穴で気をもむことはないよ。穴の上にへ火の用心の札をはればいい」

「ナニ、へ火の用心」の札……なるほど、こりゃアおそれいった。ばあさん、きいたかい。座敷の柱とちがつて台所の柱だ。へ火の用心」の札で節穴をかくすというのは気がつかなかったなア。こりゃアとてもばかどころじやアない。こっちのほうがよくばどばかだった。ありがとう、与太郎さん、さっそく、へ火の用心」の札をはるよ」

「どうだ。おれは利口だろう」

「うむ、なかなか利口になった。ばあさんや。何か菓子でもなかったかい。うん、それでいいだろう。紙につつんで与太さんに上げておくれ」

「菓子だけかい」

「こりゃアおどろいたなア。じゃア、こりゃア少しばかりだがお前のおこづかいにしておくれ。帰りになにか買ってお帰り」

「ありがたいな。利口になるともうかるものだな」

「きょうはゆつくり遊んで行きな。なに、もう帰るって、そうかい。そんならおとつあんよろしくいっておくれ、また、遊びにおいで」

「さようなら……。どうもうまくいったなア。ありがたい。おとつあん。いま帰った」

「どうした、与太郎。ほめて来たか」

「うん、家をほめたら、おれもほめられた」

「へ火の用心」の札を忘れなかったろうな」

「ああ、あれをいったら、お菓子をくれたから、催促をしたらおこづかいもくれた」

「催促なんぞしちゃアいけないよ」

「もう、どこかほめに行く家はないか」

「そんなに新しい家はないよ」

「おむこうの家へ行ってほめて来ようか」

「おむこうは普請も何もしていないよ」

「それじゃア、うちをほめるから、いくら出せ」

「自分の家をほめてどうするんだ。こんな欲のふかいやつはないな」

「なんでもいいからほめるものはないかなア、ああ、世間是不景気だ」

「不景気というやつがあるか、……そうそう太七さんの家で牛を買ったというから、その牛でもほめて来い」

「うん、行ってくるよ」

「さてさて、お前、牛のほめかたを知っているのか」

「知ってらア」

「そりゃア感心だ。なんといつてほめるんだ」

「ご普請は、総体、増づくりでございます」

「そりゃア家のほめかただ。牛のほめかたというのはむずかしいぞ。牛は『てんかく天角、ちぶん地眼、一黒、うぐす鹿頭、たじよう耳小、は歯違ちがう』というんだ。天角というから角は上をむいたのがよい。眼は地眼といつて下を見ているのがよい。一黒といつて体の色は黒く、鹿頭といつて頭は鹿の頭に似たのがよい。耳小といつて耳は小さいのがよい。歯違うといつて歯が食い違っているのがいいというが、そろそろった牛というものはまずないものだ。けれども牛をほめるときにはこういっておけばむこうはよろこぶものだ。それじゃア教えてやるから、お前もいってみろ」

「うん」

「いいか、天角、地眼」

「三角……」

「三角じゃアない、天角、地眼」

「天角、地眼」